

エコーとしての実体的紐帯

後期ライプニッツにおける複合実体の問題

三浦隼暉(東京大学大学院人文社会系研究科)

本発表は、晩年のライプニッツがデ・ボス宛書簡における「実体的紐帯 (vinculum substantiale)」概念をめぐる議論のなかで登場させた「いわばエコー (quasi Echo) (YLDB 336)」という表現の内実を探るものである。実体的紐帯という概念自体が、多くの論者たちによって様々な解釈的とされてきた。この紐帯は、基本的に、複数の実体からひとつの複合実体を構成する原理ではあるのだが、それ自体がどのようなものであるかという点に関して、ライプニッツ自身の主張は一貫したものとは言い難い。二十世紀の初頭に、ラッセルが「実体的紐帯は、哲学者の信条というよりも外交官の譲歩である」と述べていたように、デ・ボスへの譲歩としてそれを捉えることもできよう。じっさい、ライプニッツ自身、実体的紐帯の確固とした内実を定めかね、1713年8月23日のデ・ボス宛書簡においては、デ・ボスからの批判を受けて紐帯概念の内実を変更している。しかし、近年の解釈者であるルークやアンフレイらが指摘するように、実体的紐帯概念をラッセルのいうような「譲歩」としてではなく、ライプニッツ自身に内在的な問題意識から生じてきたものとして捉えることも可能であるといえる。第一に、紐帯は、ライプニッツ自身が抱えていた問題、すなわちいかにして複合実体を諸モナドから構成することができるのかという問題に密接に関わるものとして論じられている。さらに、デ・ボス自身が主張する紐帯概念とは異なるものをライプニッツは提示しようとしていた。これらのことは、単に紐帯概念が「外交官の譲歩」であるというよりも、彼自身の問題意識から発した「哲学者の信条」であることを意味している。

さて、先にも述べたように書簡中で変更を加えられた実体的紐帯概念は、1713年8月23日の前後で異なる規定を与えられている。ここでは便宜的に、変更前の紐帯を「実体的紐帯 I」、変更後のそれを「実体的紐帯 II」とする。実体的紐帯 I に関するライプニッツの主張は、1695年の『実体の本性と実体相互の交渉ならびに心身の結合についての新たな説』(以下『新説』)で示された心身結合の問題に関する予定調和的解決と連続したものであるとみることができる。『新説』において「宇宙の各実体の間に予め設定された規則的相互関係が、実体相互の交渉と言われるものを産出し、他ならぬ魂と身体との結合をもたらすのである」(GP IV 484)といわれるように、予定調和説に基づく心身結合は、各実体が生み出すものとされる。あらゆる関係を自らに内属させる個々のモナドが、それぞれ無干渉な仕方でも独自に活動することによって、あたかも交渉があるかのような事態を産出するのである。このような心身結合のあり方は、1704年のデ・フォルダー宛書簡において提示される「支配的モナド」の概念へと結びついてゆく。後にライプニッツは次のように述べている。「モナド相互の支配と従属は、モナドそのものにおいて考えるならば、表象 (perceptio) の程度の違いでしかない」(デ・ボス宛書簡, 1712/6/16, YLDB 256)。つまり、支配的モナドが従属的モナドをまとめあげるといった事態は、或るモナドの判明さの度合いが、他のモナドのそれよりも高いということしか意味していない。支配-従属関係には、実効的な作用や実在的な交

渉のようなものが想定されているわけではないのである。このことは、支配的モナドという概念もまた、予定調和の枠組みのうちで論じられるものであるということを示唆している。

実体的紐帯 I は、1709年9月6日のデ・ボスからの書簡で、パンとぶどう酒がいかにしてキリストの肉と血に実体変化するかという化体の問題を提示されたことをひとつの機会として登場してくるものである。ライプニッツはこの化体を、自身のモナドを中心とした哲学に照らして、諸実体の「結合」に存するものであると説明する。つまり、パンを構成するモナドの「結合」が取り去られることで、パンのパンとしての実体性が取り去られ、代わりにキリストの肉としての実体性が付与されることが可能になるというのである。1712年2月15日のデ・ボス宛書簡で提示された単なる調和に比べて「より完全な関係」(YLDB 232)としての規定された実体的紐帯 I は、フルモンが解釈したように、特殊で物象化された予定調和として理解することができる。それは特殊ではあれ、あくまで予定調和の枠内に収まるものなのである。

他方、1713年8月23日の書簡で登場してくる実体的紐帯 II は、以上のような予定調和説を逸脱するものであるといえる。その変更は、デ・ボスからの批判だけでなく、ライプニッツの問題意識の転換にも由来するものである。ライプニッツはこの実体的紐帯 II の概念を提示するにあたり、「動物の不死」という有機体論の文脈に依拠しており、拙論がすでに明らかにしているように、そのような文脈は経験的な次元からの探究に属している。それに対して、実体的紐帯 I を含むそれまでの予定調和説に依拠した説明は、モナドからいかにして複合実体を構成できるのかという問題意識によるものであったといえる。この問題意識の転換が、有機体論によって明らかになる動物の不死を可能にする原理として、予定調和を逸脱した、それ自体で実体的な紐帯の概念を提示させるよう、ライプニッツを導くのである。

そのような紐帯概念の変化の後、1715年4月29日のデ・ボス宛書簡において、突然あらわれるのが最初に述べた「エコー」という表現である。実体的紐帯はモナドから変化を受け取るが、モナドに変化を与えることはないという説明とともに、それは「いわばエコー」のようなのだとされる。本発表では、経験に与えられる現象を可能にするための「何か」として持ち出された実体的紐帯 II を、実体的紐帯 I が属していた、モナドからの説明という文脈に結びつけるために登場してくるのが、このエコーという表現だったのではないかという仮説を検討したい。この仮説が正しいならば、ライプニッツは先のふたつの文脈を往来しながら自らの哲学を推し進めようとしていたということが明らかになるであろう。

凡例

Leibniz, G. W. Leibnizens mathematische Schriften, hrsg. C. I. Gerhardt, A. Asher und H. W. Schmidt, 1849-1863 (Nachdr., Olms, 1971). [略号 GP 巻数 頁数]

— The Yale Leibniz: The Leibniz-Des Bosses Correspondence, Transl. by B. C. Look and D. Rutherford, Yale University Press, 2007. [略号 YLDB]